



4. 体験学習プログラム ～国際社会や地域の課題に目を向け、視野を広げる～



ボランティア・NPO 活動センターは、学生が長期休暇を利用して国内の地域や治安・衛生環境が安全と判断される海外を訪問し、その地域が抱える問題に触れるとともに、地域貢献、福祉、環境関連の現地NPO・NGO などとの交流を通して、その課題解決の取り組みなどを学ぶ「体験学習プログラム」を、夏季と春季の休暇期間に実施しています。

2020年度は、新型コロナウイルス感染症感染拡大の影響により、海外はもとより、国内においても自由に訪問することができない状況となりました。しかし、オンラインツールを使うことで、世界中どこでもつながり、コミュニケーションをとることができるということを体感した一年でもありました。そこで、訪問が叶わない地域については、オンラインで現地の様子を見聞きし、視野や知見をひろげるプログラムを実施しました。

海外体験学習プログラムとして、フィリピンとタイの2つのオンラインスタディツアーを実施しました。継続的に海外支援を実施されてきたNGOのコロナ禍における活動状況や活動地の様子（海外からライブ中継）、またこの困難な状況に対してどのように対応されているかについて学ぶことを目的としました。国内体験学習プログラムでは、オンラインと対面を組み合わせた2つのプログラムを実施しました。一つは、「つながる福島ワークショップ」。例年実施してきた「福島スタディツアー」は、遠方のため現地訪問ではなく、大学に集まった学生と福島とをオンラインでつなぎ、福島について知り、考えるワークショップを実施しました。もう一つのプログラムとして、滋賀県近江八幡市を日帰りで訪問し、左義長まつりを取り上げ、新型コロナウイルス感染症が地域に及ぼした影響やそれを受けての取り組みなどに焦点をあて、持続可能なまちづくりを考えるプログラムを実施しました。

事業名	海外体験学習プログラム オンラインスタディツアー 「コロナ禍の中、海外の声を聴く」
実施日	フィリピン：2021年3月9日（火）14時00分～16時00分 タイ：2021年3月15日（月）14時00分～16時00分
実施形態	オンライン（Zoom ミーティング）
実施主体	ボランティア・NPO 活動センター
参加人数	本学学生 33 名
協力団体	フィリピン：認定 NPO 法人アクセスー共生社会をめざす地球市民の会 タイ：ツナミクラフト

1. 経緯・目的

例年海外に渡航してプログラムを実施していましたが、新型コロナウイルス感染症感染拡大の影響により実際に海外に行くことは叶いませんでした。初めての試みとして、Zoom を使って海外とリアルタイムでつながり、オンラインスタディツアーを実施しました。今まで長年スタディツアーを実施されてきて、海外体験学習プログラム学外企画として、龍谷大学生を受け入れ実績のある2団体に協力していただき、それぞれ、フィリピン、タイの現地スタッフと日本のNGO 団体、そしてそれぞれの自宅にいる龍谷大学生たちとをつなぎ、現地の今の様子、海外の生の声を聞くというプログラムを実現することができました。

2. 概要

①事前学習

実施当日の2時間を、より有意義にたくさんの方の意見を吸収できるように、フェアトレードカードを使った事前学習を行いました。あらかじめ、学生の自宅に、それぞれの団体の資料、パンフレット、そして、NPO 法人アクセス（以下、アクセス）が扱っておられるフェアトレードカードを郵送して、学生に身近な人へカードを送るという体験をしてもらいました。送った方に対して、後日カードの感想を聞き取るという課題も出し、より多くの方から、カードのフィードバックを得られるようにしました。この内容は今後のカードづくりの参考にしてもらいます。また、事前に団

体の紹介動画や、TV番組などの動画サイトをメールで連絡しておき、視聴した感想、出てきた質問内容などをGoogleフォームに入力してもらいました。

② 3月9日 フィリピン

協力団体：認定NPO法人アクセス共生社会をめざす地球市民の会

テーマ：スラムに暮らす若者の声を聴く

内容：アクセスのフィリピン現地法人から中継し、都市スラム「トンド地区」に暮らす若者のライフストーリーを語っていただきました。また、貧困を緩和するフェアトレード事業について、アクセス事務局長の野田沙良氏から解説いただきました。

	3月9日(火) フィリピン
現地中継	団体の紹介
現地中継	新型コロナ感染症の影響
ビデオツアー	都市スラム・トンド地区とは
現地中継	都市スラムの若者のインタビュー（通訳あり）
解説	フィリピンの貧困や、都市と農村の関係
ビデオツアー	フェアトレード生産地、生産者のメッセージ
解説	フェアトレードについて

③ 3月15日 タイ

協力団体：ツナミクラフト

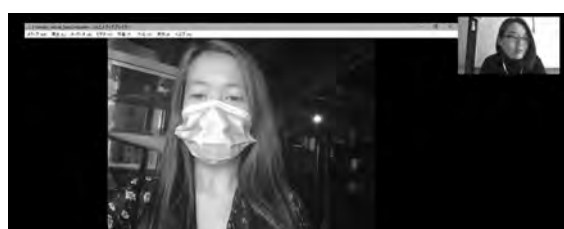
テーマ：農村コミュニティリーダーの声を聴く

内容：タイに住む日本人通訳の方から、タイの文化や宗教について紹介いただきました。ツナミクラフトスタディツアーのホームステイ先から村の様子を中継、コミュニティベースドツーリズムを実践されている旅行会社スタッフのインタビューや、ツナミクラフトから持続可能なツーリズムについてお話をうかがいました。

	3月15日(月) タイ王国
解説	団体の紹介
現地中継	タイのコロナ事情、今のまちの様子（タイ中部）
ビデオツアー	タイ紹介
解説	「サステナブルコミュニティベースドツーリズム」持続可能なツーリズムについて
現地中継	タイ南部の村ホームステイ先、旅行会社インタビュー（通訳あり）

3. 受講者の声・得られた効果など

- ・スラムの現状や女性の今までの辛い経験を聞いている時はとても心が痛く、底なし沼のような現状を前にこんなのでしょうかも無い、と暗い気持ちになっていました。しかし、今変えたいと思った人達が動き続けることで何十年後かに、状況が変わってくることを信じて色々なことに取り組み続けたいと思いました。
- ・フィリピンの自分と同じ年齢の方が、自分の想像を超えるような苦勞をしているという現実に目を伏せてはいけな。ただ聞いて終わらせるだけではなく、どうやって問題を改善させるか行動に移す事が大切だと思いました。
- ・とても内容の濃いお話を聞けて、新型コロナウイルス感染拡大の影響で苦しんでいるのは私たちだけではないということを理解することができました。
- ・現地についてオンラインを通して見ることができ、日本で見られない光景もあり行ってみたいと思いました。街並みの中継は、留学などが厳しくなっている今、貴重な情報になります。
- ・津波で被災した人達のための支援やコロナ禍での対策の話聞いて、日本だけではなく世界で同じ困難と戦っているのだなと思い、改めて世界とのつながりを感じることができました。
- ・タイとフィリピンは同じ東南アジアでも全然違うのだなと自分の目で確かめることができてよかった。このオンラインスタディツアーを通して、東南アジアにある貧困問題などに非常に興味や関心を持つことができました。これらの問題が解決していくように私自身何かしら行動を起こしていこうと感じました。
- ・タイの風景がとても印象に残り、旅行している気分が嬉しかった。アジアの国々について細かく学んだことがあまりなかったの、今後アジアの諸地域に視野を広げて学



フィリピンの若者のインタビューの様子

びを深めたいと思った。コロナ禍が終息したらぜひタイに行きたい。

4. コーディネーター所感

多くの学生が、大学に入ったら海外に行みたい、海外のことを知りたい、視野を広げたいという希望をもって入学してくるのではないのでしょうか。他にも、たくさんの人と話したい、バイトや旅をしてみたい、サークル活動に取り組みたい……。そういった大学生であればあたりまえの思いの多くがかなわなかったこの一年でした。日本中が、世界中がそうなのだから、仕方ないじゃないか、そう思って彼らは、不平を言うことなく、この1年をじっと耐えてきたのです。それがわかったのが、このプログラムの募集を大学で始めた時でした。大学にはポータルという大学独自のお知らせサイトがあります。そこにオンラインスタディツアーの内容を掲載するとあっという間に、20名の申し込みがありました（定員を最初20名としていましたが、30名に増員しました）。学生たちは、海外について知りたいんだ、もっといろいろなことに挑戦したいと思っているんだと、改めて気がつきました。

このプログラムは、現地で地道な活動を10年、20年と続けてきたNGO団体の協力のもと実現できたものです。そこでは、現地の人に寄り添い、ともに課題解決に取り組む活動がずっと継続されてきたのです。常に人と向き合い、逃げることなく、活動を継続されてきたNGO団体に改めて敬意と感謝を伝えたいと思います。

フィリピンでは、スラムに住む若者が涙を流しながら、自分の人生について語ってくれました。涙を流さずには語れない内容でした。タイでは、地域コミュニティを大切にしつつ、ツーリズムを進めてきた旅行会社の方からお話をいただき、実際にホームステイ先の様子を中継いただきました。のんびりとしたタイ農村の光景は学生に目に焼き付いたことと思います。両国ともに、協力していただいたNGO団体の協力なしには聴くことが出来ない言葉です。そして、それを聴くことが出来た学生たちは、これからコロナ禍をのりこえて、どんな人生を歩んでいくのでしょうか。人生は自分のものです。日本のように豊かな国に生まれた若者の一人として、どうか、このプログラムで聴いた言葉と気

づきを胸に、実りある人生を歩んでいってほしいと願っています。



タレーノーク村の風景

〈報告者：上手 礼子
(瀬田キャンパス コーディネーター)〉

○国内体験学習プログラム／福島県【春季】

事業名	つながる福島ワークショップ ～今年、福島スタディツアーには行けない。だからこそ今、福島を語ろう！～
実施日	2021年3月5日（金）13時30分～16時00分
場所	深草キャンパス 21号館 402教室
実施主体	ボランティア・NPO活動センター
参加人数	本学学生14名
参加学生	大橋 寛海(社会4) 朝倉 勇人(社会4) 高田 莉沙(経営3) 杉山 わかな(社会3) 早川 歩伽(文学2) 丸山 堅也(法学2) 多鹿 貴大(政策2) 秋田 恵里(農学2) 西山 佳佑(農学2) 稲岡 和穂(農学2) 井関 萌乃(文学1) 武田 知千(文学1) 壺岐 亮芽(政策1) 伊野 涼雅(短大1)
協力	青田 由幸氏(NPO法人デイさぼーとぴーなっつ)／坂本 唯氏

1. 経緯・目的

今年度の春季国内体験学習プログラムでは、例年通りの宿泊を伴う「福島スタディツアー」の実施は困難であることから、オンラインを併用し、関西に居ても福島について学び、語り合う機会をつくろうと、このワークショップを企画しました。



2. 概要

●講師：

NPO法人 デイさぼーとぴーなっつ
青田由幸氏

大学院生 坂本唯氏

●プログラム内容

- (1) 参加者の自己紹介
(何故、このワークショップに参加したのか等)
- (2) 竹田コーディネーターが2015年度から毎年実施している福島スタディツアーの概要を動画資料などで紹介
- (3) 大学院生の坂本氏のお話
以前、福島スタディツアーに参加し、このツアー参加がきっかけで、卒業後、福島研究を始めた坂本氏が「なぜ、こんなに福島にハマったのか」について、気持ちの変遷を語ってくれました

- (4) 青田氏からのお話（福島とオンライン）
NPO法人デイさぼーとぴーなっつ
3月地震の被害状況や、震災以降の福島の現状などについてお話していただく
- (5) 坂本氏と青田氏のお話を聴いて感じたことなどをグループに分かれてトーク
- (6) 出た話題を共有
- (7) まとめ・終了
- (8) 自由におしゃべりタイム
※もっと話したい人が残って語る時間

3. 受講者の声

- ①活動の記録として動画を視聴しましたが、自身が参加し始めた以前のボランティア状況や、改めて自分たちがお話を聞かせていただいた方々のことを深く思い出しながら昨年までの様子を再度イメージしながら心がグッと締め付けられる気持ちをまた感じました。また、卒業生の坂本さんの発表を通して人に会ってじっくりお話を聞くということに強く共感しながら、辛いことやこれから先の福島県のことを見続けながらモヤモヤと向き合っていかなければと思いました。青田さんのお話は何度聞かせていただいても身に染みるお話だと感じます。津波や原発、行政やメディアについてテレビや新聞などで知ることはできない、知っているつもりでも違う場合もあるなど、一方向からの情報だけでなくあらゆる視点から物事を見ることが必要であると感じましたし、原発について今一度考え、決して災害が他人事ではないことを強く実感しました。

- ②立場によって考えや思いがあり、とても難

しい問題だと感じました。今回は特に処理水について私の中に残っていたのですが、このような自然災害やそれに関連する出来事はたくさん考えても分からないこと、どうしようもないこと、答えを導き出したいことが多くあると改めて感じました。

新型コロナウイルス感染症感染拡大の影響により、この1年間家にいることがほとんどでした。病みかけました。福島の方々が放射線によって家から出られなかったとき、こんな感じだったのかなと思いました。実際は放射線とウイルスとは全然異なり、そもそも家に帰れない方もいて現実はまだ過酷なものであったらとより感じました。私自身は今後、栄養教諭の道に進みたいと考えており、その時には栄養教諭として正しい情報、知識を発信していかなければならない立場になります。これからもしっかり学び、頑張っていこうと思えるワークショップでした。

- ③貴重なお話を聞く機会を作ってくださいありがとうございました。いろいろな人の意見を聞き、少しだったけど話し合えてよかったです。私にとってとても貴重な経験でした。私は青田さんや竹田さんのお話を聞いているなかで、その時の人々の混乱や恐怖、また呆然とした感じなどを自分の頭のなかで想像してみるもののなかなか上手くいかず、ぼやっとしたイメージでしか捉えられませんでした。それほどの非日常、非常な事態だったということだと思います。今も自分の考えや感じていることが上手く整理できていませんが、今回聞いた福島の話の他人事として終わらせることはしたくないと強く思います。私はその時色々なことを感じて、時間が経つとその時のことはすぐに忘れてしまうけど、このことは心の中に留めておかないといけないものだと思います。

福島をはじめ東北の人たちの話を聞くことは、自分と大切な人を助けることにつながるし、震災を経験し悲しみや悔しさなどいろいろなものを背負った人々が教訓として次の被災者に訴えている声を聞かないで被災してしまうことは、悲しいし何かおかしいと感じます。まずは、家族と地震や津

波が起きた時の行動についてきちんと話し合おうと思いました。

- ④私が、今回参加して感じたことは2つある。1つ目は、自分が東日本大震災に対して思い描いていたイメージと現状とのギャップに驚かされた。震災から10年ほど経過し、マスコミなどでも復興が進んでいるという報道を目にすることが頻繁になった。私自身それらを見ることによって震災のことが少し過去の出来事であるという気持ちになっていた。だが、まだ復興が十分な地域も多く存在し、私達に伝わってくる情報が全てではないという現実を思い知らされた。

2つ目は、防災について改めて意識しようと感じた。近年、首都直下型地震・南海・東南海地震など大きな災害が発生すると危惧されている。今回3.11の生の話を聞いて、生半可な対策では乗り切れないと感じ、少し遠い存在と思っていた震災が自分にも近づいていると考え、恐怖感を持った。青田さんの話でもあったように、正しい情報を知り、想定外から想定内へできるよう防災対策をしていこうと思う。

- ⑤青田さんの話を聞いて震災で亡くなった方で、直接死より関連死の方が多き事は1番驚きました。そもそも災害関連死という言葉を知り、改めて原発事故の悲惨さを感じました。東日本大震災の被害を受けた方々は津波から逃げるかどうかや今助かってその後どうやって生活していくか等震災直後から今日まで生死に関わる決断を沢山してこられたと思うと本当に胸が痛くなりました。東日本大震災の時、私は小学生2年生だった事もあり今まで東日本大震災はどこか他人事のように思っていたがこのような話を聞いて、たまたま私が関西に住んでいただけであって誰にでも起こりうることに気づき、もう一度防災について考える機会にもなりました。来年も福島ワークショップがあれば参加したいと思いましたし福島に行けるようになったら絶対に行きたいです。



⑥今日はいろいろな人の実際の声を聴きました。福島スタディツアーに参加された方の声、東日本大震災を経験された青田さんの声、初めてツアーに参加した学生の声。そのどれもが僕にとっては新鮮で、感じるが多々ありました。復興が進んでいるという報道の裏には、今もなお苦しんでいる人、国の政策に不安を感じる人などの存在があることを改めて知りました。そうした実際の状況を自分の目で確かめ、身体で感じたいと思いました。

⑦今回のワークショップでは、災害の恐ろしさ、そしてそこから出た課題など様々なことを学ぶことができました。しかし、今回のお話で恐ろしいと思うことが多すぎて今回学んだことよりもその感情の方が大きいというのが正直な本音だ。しかし、てんでんこのお話を聞いてそんな避難方法を教えられるんだと驚いたし、同時にかなり重要なことなのになぜ私たちは教えられていないのだろうと疑問に感じた。

知識だけで全てがどうにかなるわけではない。しかし、その知識の差というのは確かに数字に表れてくるのではないだろうか。1人でも正しい知識を知り、それを実行していくことが大切なのではないかと今改めて感じたし、竹田さんがおっしゃった通り、死者の数はただの数ではなく、名前があり、そして一人一人の人生がある。私たちは、なかなかそれらを実感できない。私たちは知識と、そしてもっと現実的なものとして受け止めていく必要があるのではないかと考えた。今まで福島についてあまり知識を深めたことはありません。今の私が十分にその真の意味を理解できたかは分かりませんが、自分にとって大切な機会に

なったと思う。

⑧去年福島に訪問し、来年もまた絶対来たいなと思っていました。今年は現地には行くことはできませんでしたが、このような機会を作ってくださって本当に嬉しかったです。青田さんのお話を聞かせていただいて、聞いたことのあるお話もあれば、新しく知ったこともありました。特に、甲状腺がんの子どもが今、200人を超えていることに対して原発の影響ではないと行政が言っているという現実には、もう、なぜそこまでして認めないのか、何を守ろうとしているのかなど、いろいろな気持ちが渦巻きました。青田さんのお話を聞く中で、去年聞いたけど、自分が忘れかけてしまっていたこともあることに気づきました。定期的に思い返し、考える機会を持つことが大切だなと思います。

また、今回は坂本さんのお話も聞かせていただきました。スタディツアーだけでなく、個人でも何度も福島を訪れ、研究されていることを知りました。私も、今度は、福島を旅行で訪れ、福島の人々にもう一度会いたい！という気持ちが強くなりました。震災のことについて、改めて考え直し、自分や大切な人を守るために今回のこと、また、去年の活動を含め、周りの人に話したいと思います。

⑨「フレコンバッグが目の前にあっても、次第に気を留めなくなった」という現地の人々の声や、沢山のソーラーパネルが設置されている現状を知り、時間が経つにつれて『非日常』であることが『日常』に溶け込んでしまうことに不安を感じました。前者は『対処すべき問題が常態化してしまっている』ことに、後者は『復興の在り方が迷走している』ことにです。

ただ、その不安や心配の感情に基づいて、現地の人たちに『もっと気をつけるべきだ』とか『より問題視して、現状を改善するよう世間に知らせるべきだ』と懇願することはできないと思いました。なぜならば、現地の人々の思いを知り、世間（または政府）との認識のギャップを理解し、改善を促す役目を背負っているのは、当時被災しなかつ

た人達だということに、ワークショップ全体を通じて気がついたからです。この日の学びを糧に、更に福島について理解を深めようと思います。

⑩東日本大震災の説明をただ聞くのではなくて、被災された方の生の声を聞くことができたのは貴重な体験でした。また、話を聞くだけでなく、グループになって、ほかの人の考えに触れられ、自分の疑問に対して答えてもらえたこともすごく良かったです。いつ自分が被災するか分からないということを念頭に防災セットを用意しておいたり、避難経路を確認したり、自分にできる最低限の準備をしておかなければならないと思いました。

⑪毎年福島スタディツアーに参加していて今年度はコロナで行かなくて残念でしたがこの様な形でも青田さんからの話を聞くことができてとても良かったです。青田さんのお話を聞いて私は今年から障害者施設に就職するので避難の仕方や避難先での生活をどうしたら良いかと考える様になりました。関連死が多かった事について、なんとかして津波や地震から免れたのに、なぜ守れない命があるのかとその不条理をどうにかできないのかという気持ちになりました。自分がこれから働く職場では障がいを持った方々と避難する、避難先で生活することを想定して普段の生活から有事に備えた活動などをしていきたいと思いました。



4. コーディネーター所感

今年度は、様々な制約の中でどのようにして福島への想いをどうつなごうかと途方に迷いました。開き直って、この想いをそのままタイト

ル「つながる福島ワークショップ。今年は福島に行けない！だからこそ、今、福島を語ろう！」にしました。学生への広報がほとんどできない状況下、どれだけの学生が参加してくれるのか不安でしたが、今まで宿泊を伴うものは少しハードルが高いと感じていた学生が参加するなど、新たな層の学生も参加してくれました。実際に赴いて、五感を使って感じスタディツアーで得るものは大きく、その代替えプログラムはなかなか企画することはできませんが、それでもこのコロナ禍で制限された中だからこそ、考え、気づき、語り合えることもあり、諦めずにオンラインで実施できて良かったと感じています。

また、以前にこの国内体験プログラムに参加してくれた学生が、講師として自分の経験や福島を研究する経緯を語ってくれたこと、現役学生で複数回参加した学生が一生懸命自身の気づきを語り、伝えようとする姿を見て、この5年通い続けた成果を垣間見れました。

〈報告者：竹田 純子
(深草キャンパス コーディネーター)〉

○国内体験学習プログラム／滋賀県近江八幡市【春季】

事業名	近江八幡スタディツアー ～近江八幡の左義長 コロナ禍における伝統文化の継承について考える～
実施日	オリエンテーション：2021年2月24日（水）10時30分～11時30分 フィールドワーク：2021年3月3日（水）9時00分～17時00分 事後学習会：2021年3月12日（金）13時00分～15時15分
訪問先	滋賀県近江八幡市
実施主体	ボランティア・NPO活動センター
参加人数	本学学生14名
参加学生	赤木 宏斗(社会3) 寺井 英里子(社会3) 濱田 葵(文学2) 今中 野々香(国際2) 赤沢 彩花(社会1) 岡本 千聡(農学1) 柿沼 萌香(農学1) 松村 優輝(農学1) 三宅 鈴香(農学1) 山本 那津子(短大1)
協力	田口 真太郎氏／左義長保存会／一般社団法人近江八幡観光物産協会 他

1. 目的

新型コロナウイルス感染症が地域に及ぼした影響やそれを受けての取組みなどに焦点を当て、伝統文化の継承をはじめ、持続可能なまちづくりを考えることを目的とします。

2. プログラム内容

(1) オリエンテーション

2月24日（水）10：30～11：30

- ・自己紹介
- ・参加する上での注意説明
- ・感染症対策についての説明 など

(2) フィールドワーク

3月3日（水）9：00～17：00

午 前：白雲館にて左義長保存会会長の安田氏、観光物産協会事務局長の田中氏へのヒアリング

昼休憩：食堂ヤポネシアで地元食材をつかった昼食の後、自由にまち歩き

午 後：・じゅらくの北川氏へのヒアリング
・旧伴家住宅（左義長展示など）を見学
・まちや倶楽部にてヒアリングしたこと整理をするワークショップ

(3) 事後学習会

3月12日（金）13：00～15：15

- ① チェックイン（アイスブレイクとふりかえり）ジャムボードを使って、自身で深めてきたテーマを共有
- ② グループワーク1：テーマ別ディスカッション
伝統文化と経済・伝統文化とまちづくり・伝統文化と郷土愛の3つのテーマに分かれてディスカッション

③ 結果の共有と次の課題説明

④ グループワーク2：伝統文化の新しいカタチ

⑤ 結果の共有

⑥ チェックアウト（感想と総括）

3. 参加学生からの報告

赤木 宏斗

（社会学部 社会学科 3年次生）

今回の体験学習プログラムを通じて、左義長まつりは地域に根付いた伝統文化であり、地域にとって様々な良い効果を与えている物だと感じました。例えば、左義長ダシ制作によって地域のお金を地域に還元していること。ダシ制作を通じて地域住民を一体にし、地域力の向上につながっていること。そうした地域の文化が外部の目に留まり、観光につながっていること。昔から連綿と続いてきた左義長まつりが、世代に共通した地域の誇りにつながっていること。一日を通じてお話を聞いた中だけでも、たくさんの効果があることを知りました。そのような中で、今まで当たり前に行われてきた祭りの中止を決定することは、そう簡単なことではなかったのだらうということを、左義長保存会会長の安田さんのお話を聴いていて感じ取りました。

今年度、新型コロナウイルス感染拡大の影響で、左義長まつりに限らず、各地で祭やその他伝統文化の開催ができなくなりました。このような状況の中で懸念されるのは、伝統文化に触れる機会が減少し、身近でなくなり、人々の関心が薄れていくことだと感じました。例えば左義長まつりであれば、ダシ制作という地域を一つにしていた物がなくなること。地域外の人間が左義長まつりの存在を知る機会が失われたこ

となど。「人々が感心を持たなくなった場所から劣化していく」ということをかつて大学の授業にて学びましたが、それを食い止める必要があると考えます。私は以前より一学生立場として伝統文化に関わる中で、その必要性はなんとなく感じていましたが、今回のプログラムを通じてより深く考えることができました。今後はそうして考えたことを社会で活かしていければと思います。



左義長保存会の方から左義長のダシについて伺う

寺井 英里子

(社会学部 社会学科 3 年次生)

私は今回の体験学習プログラムにおいて、伝統を守ることの意義を学びました。

これまでの歴史を繋いできたことで今がある。だからこの歴史ある左義長まつりに誇りを持っており、誇りを持っているからこそ良くない箇所を変えて伝統を守っていく必要があるというお話を、じゅらくの北川さんから伺いました。さらに左義長まつりは、世代を超えて地元の方々のつながりを作ることを助けたり、地域の大人が子供の成長を見守るためのツールとしての役割を果たしたりしているということも、左義長保存会の方々から伺いました。

これらのことから、近江八幡における伝統には、地元の方々の帰属アイデンティティや誇りを築いたり、相互扶助的な繋がりを作ったりする役割があるのではないかと考えました。そういった住民の方々の日常に根差している伝統や、実状に合わせて変えて伝統を守ることこそ真に意義のあるものなのではないかとも考えました。

いろいろな伝統がありますが、中には、議論の余地なくブラックな校則を生徒に守らせ、部活を辞めることを無条件に悪だとして、人々の持つ考えや立場を無視し「伝統だから仕方ない、これに従わないのはわがままだ」といって苦痛を強いるものも存在します。

今後は、個々の“伝統”について、時と場合に応じて守ることができる伝統かどうかを考え、実際に伝統を守るため声をあげている人を応援したいと思いました。



白雲館にて左義長まつりについての話を伺う

濱田 葵

(文学部 臨床心理学科 2 年次生)

私は昨年、福島国内体験学習プログラムに参加して、同時期に実施されていた昨年度の近江八幡の国内体験学習プログラムにも興味を持っていました。今回の近江八幡のプログラムについてお話を聞いた際に、自分自身の地元のお祭りが去年は中止になったことを受け、お祭りに関わる人達がどのようにお祭りを守り、どんな気持ちでコロナ禍を過ごしていたのかを知りたいと思い、参加を決めました。

初めて近江八幡市に行き、実際に左義長のダシを見て、左義長のダシ全体が食べ物で出来ていることや、五穀豊穡を願い作られていることも知ることが出来ました。お祭りに関わる人達は、ダシを作る際に「どう表現するか」「何の材料を使って色を出すのか」にこだわっており、その想像力と再現する力に驚かされました。

このプログラムに参加して最も印象に残っていることは、左義長まつりが地域の人の繋がりに大きく関わっているということです。どの世

代の人でもお祭りを楽しみ、共通の話題として盛り上がることができると聞き、左義長まつりは地域を繋ぎ、観光や経済のためにも無くてはならないものだと分かりました。

今回、実際に自分の足で現地に行き、自分自身で地域の人の話を聞くことができたからこそ伝統を継承していくことの難しさや、地域の人の地元愛を強く実感しました。自分がどこに住んでいたとしても、その地域で受け継がれているものを知り、多様な形で関わり、守り続けることが地域の人同士の繋がりも守ることになるのではないかと思います。大学生である私達もその地域の一員として関わるのが大切だと学びました。

今中 野々香

(国際学部 国際文化学科 2年次生)

私は国内体験学習プログラムに参加して2つのことを学んだ。

1つ目は地元愛についてだ。左義長保存会の安田会長やじゅらくの北川さんのお話から、近江八幡の住民は地元を非常に愛しているということを知った。特に、左義長まつりを中止するか否かにおいて苦渋の決断をされたことや、近江八幡で死にたいと北川さんがおっしゃっていたことが記憶として鮮明に残っている。このように近江八幡の方々の地元愛が強い原因を考えた。それは、左義長まつりにより培われた地域の絆である。ダシ製作等で年代を超えた地域の人々が協力して準備を行う。そして、北川さんのお話にもあったように、祭が終わった後でも住民たちでお酒を飲み、団欒する。このようにして生まれた絆が地元愛の原因のひとつなのではないかと考えた。

2つ目は、日本独特の文化である。祭自体が日本文化であり、かつ前段落でも述べた通り、祭が地域の人々を繋ぐことも日本独特の文化である。私は将来、外国人に日本文化を教える仕事に就きたいと考えている。それゆえ、日本文化について深く学ぶことのできる本プログラムに参加した。本プログラムで学んだ日本文化、特に祭や、祭による地元愛について外国人に伝えていきたいと思った。そして、日本の良さをさらに多くの外国人に知ってもらいたいと思った。

最後になりましたが、近江八幡の伝統文化等

について学ぶことのできる貴重な機会を設けてくださり、ありがとうございました。お聞きするお話の全てが新鮮で、充実した日を過ごすことができました。この経験を今後に生かしたいと思います。



左義長保存会の元副会長で飲食店をされている北川さんのお話を聴く

赤沢 彩花

(社会学部 コミュニティマネジメント学科 1年次生)

私はこの春休みに近江八幡市を訪れる国内体験学習プログラムに参加した。コロナが世界に拡大して私たちは様々な行動を制限されてきた。そんな中でフィールドワークに出て得た情報をまとめ話し合うという大学生らしい学びをここで体験したいと思った。また、私は滋賀県に在住しているので近江八幡市でどのような伝統文化があり、まちづくりに活かしているのかを学びたいと思いこのプログラムに参加した。

まず、私は左義長保存会の安田会長ら3名の方に左義長まつりについてお話を伺った。

この祭りは近江八幡市で450年以上前から行われている火祭りで、干支にちなんだ「ダシ」を製作し、地区ごとに競い合うということを聞いた。私は近江八幡市でこのような祭りが行われていることを初めて知った。また、製作した「ダシ」を燃やして0に戻すという話を聞いた時、もったいないと思ったが、その分製作した人の思いが毎年込められているのではないかと感じた。次に、じゅらくの北川さんにお話を伺った。祭りの準備をする人たちだけでなく、差し入れやスーパーマーケットでの宣伝など地域全体で祭りを作り上げているという話を聞いて、地域の人達とのつながりの大切さがわかった。

私は、伝統文化は昔からやっていることをそのまま行うものだと思っていたが、今回のプログラムで左義長まつりは新しい要素を取り入れながら行われていると学んだ。そして、祭りだけでなく昔からある町家も飲食店にリフォームするなど、形を変えて残していることが分かった。今日まで伝統文化が受け継がれているのは、一人一人が自分の地域に誇りをもって未来につなげているからだと感じた。

今回のプログラムでは自分の考えをインプット、アウトプットする機会が多かった。限られた時間で学んだことをまとめるのは難しかったが他のメンバーとの意見交換は楽しく、有意義な時間を過ごせた。これからは、グループワークなどが行われている授業を積極的に受けたいと思う。そして、まちづくりや伝統文化についてもっと関心を深めるため、本や新聞を読み、地域のイベントに参加するなどして学びを深めていきたい。

岡本 千聡

(農学部 資源生物科学科 1 年次生)

私は「伝統を変えることで守る」というキーワードで学習を進めました。情報化が広く進む現代で、特にこのコロナ禍でそれは顕著に目立っています。大学の授業や入社試験の面接がオンライン化されたり、家にいる自由な時間が増えたりしたことで世の中の情報に触れる時間も増えたというデータもあります。そんな中で、一見相反するように見える伝統文化とソーシャルメディアをつなげる事も一つの文化の持続性になり得ると思いました。SNS などを活用する考えが浮かんだときは少し安易かと思いました。しかし、それだけ自分の近くにある存在なのだという事に気づき、その距離の近さから閲覧者も多く獲得できると思いました。また、SNS などで宣伝してもその街や祭りの持つ特性は変わらないのではないのでしょうか。SNS はきっかけにはなりますが、祭りそのものが SNS になることはありません。いつもの一年とは違う社会情勢だったから得られた発想であるともいえます。

この体験学習プログラムを通じて大きく感じたのは、異なる意見と対面する面白さです。同じ話を聞いていても、何を感じるのかが本当に様々で、自分の考えの発展にもつながりました。

また自分の言葉で述べることは難しく、いくつも課題が見つかりました。日常使わなかった頭の使い方ができ、とても良い機会になったと思います。機会があればまた参加して、このような経験ができればと思っています。

伝統文化というと堅いイメージがまだありますが、作り上げてきたのは紛れもなくその時代を生きた一般の人々だということに気づかされました。また近江八幡が「結果として」観光地になった例は、長い目で見てとても理想的だと思います。これからはオンラインで対応できるものと、実際に触れて学ぶべきものを見分けてそれぞれを柔軟に活用していけるようになりたいです。



文化伝承館の見学

柿沼 萌香

(農学部 資源生物科学科 1 年次生)

私がこの体験学習プログラムに参加するまでは、伝統文化や地元について考えたことがありませんでした。全く知らない場所へ行くことや、いろいろな人の話を聞くことが好きなので、このプログラムに参加しました。

左義長まつりの話を聞いて印象に残ったことは、地元の人はもちろん、他の地域の人にも愛されながら成長している祭りだと感じたところです。意見が食い違ったり、たまには喧嘩をしたりしても、左義長まつりを盛り上げたいという思いは皆変わらないことが分かりました。コロナの影響で今まで通りに開催することが難しくなっていますが、多少開催の形が変わっても続けようとする姿勢もかっこいいと思いました。

このプログラムの中で新しく学べたのは、伝統文化が経済を回しているということです。今の流行と地域で伝統的なものを上手く融合させ、

左義長まつりのように地元の方達で大事に守っていくことで、町に良い影響を及ぼしていることに驚きました。お話を聞いた後にそのことについて調べましたが、たくさんの人が経済を立て直すために尽力されていることを知ることができて良かったです。

この体験学習プログラムに参加して、いろいろな方の考え方に触れたことで、自分の考え方も変わりました。自分では、行動で示さないと相手に伝わらないと思っていても、意見が合わずに自分が傷つくことも怖く、決断に躊躇していました。しかし、挑戦しないと自分も成長しないし、自分自身の可能性を否定してしまっていることに気づきました。

これからは、伝統文化と食の関係について調べてみようと思います。そして、お話を聞いた方達のように何かに熱くなれる人になりたいと思いました。



近江八幡の伝統的な街並み。左義長まつりは、このエリアで開催される

松村 優輝

(農学部 食料農業システム学科 1 年次生)

私はこの近江八幡の体験学習プログラムに参加して、これから求められる町の仕組みを考え直す良い機会になりました。

現代では少子高齢化が叫ばれていますが、ただ単に「若い人を呼んでよりよくしよう」と一言に言ってもなかなか難しいのが現状です。しかし、今回訪問した近江八幡市では左義長まつりを基礎とし、観光資源よりまず先に住民同士の交流や、繋がりを重視したまちづくりにはっとさせられました。全国には様々な祭りがありますが、この左義長まつりでは祭りで使う「ダシ」を各自治会で集まって作り、最後は燃やし

て奉納しています。一年周期で変化のあるこの祭りは、毎年リセットされるため、外部からの新しい住民が加わりやすいのではないかと感じました。さらに、新しい住民が安心して参加できる要因に、伝統や慣例を柔軟に変化させてゆき、時代に沿ったものにしていくことも、より良いまちづくりをするうえで重要だと勉強になりました。祭りが元となり町が賑やかになる、そしてその様子を見て観光客が訪れるという流れは、インバウンド需要が進む日本がもう一度が立ち返る視点だと思いました。

最後に、この近江八幡での学びの中で強く感じたのは、やはり左義長に携わる方の熱い気持ちです。時代がどれだけ変化しても、昔からやってきたことだからやっているということではなく、左義長まつりが大好きだからだということです。

今回の体験学習プログラムを通じて、まちづくりをする上で大切なことを学ぶことができました。今後はこれを生かし、自分の住んでいる町でも大学生がどのように関わればより良いものにできるか考えていきたいです。

三宅 鈴香

(農学部 資源生物科学科 1 年次生)

この体験学習プログラムに参加して最も印象的だったのは、左義長まつりに関わる方々の熱意です。じゅらくの北川さんにお話を伺った時に「左義長のためなら死ぬる」とはっきりと言いつけられたのを聞いて、人生や命を懸けられることがあることに衝撃を受けました。

私はプログラム全体を通して、このように熱意ある人々が私たちの日々の暮らしを支え、豊かにしてくれていることに気づかされました。規模は違ってもお祭りや町おこしが行われていたり、それが地域のコミュニケーションの大きなきっかけとなったりすることは、近江八幡市でも私の地元でも、また全国どの地域でも共通していることなのだと思います。私は今年から一人暮らしを始めたことで、今まで以上に地域の方々と交流がなくなり一人で暮らせているように感じてしまうことがあります。しかしそうではなく、家族をはじめ、支えてくださっている地域の方々が大量にいることを心得て過ごしていかなければならないと改めて感じる事ができました。

また、グループワークでの学びも大きかったです。自分の考えの共有だけでなく班ごとに図式化し、つながりを見つけていく作業がとても難しく、刺激となりました。同じテーマで集まっても別の角度からの意見が出たり、違うテーマで集まったメンバーでもなぜか似た意見が出たりするなど、自分にはない考え、感覚を知ることができたこともとても面白く、もっといろいろな人と出会って話してみたいと思うようになりました。

今回のプログラムは短い期間でしたが、たくさんの方の新しい発見や出会いがあり、とても楽しかったです。これからは様々なことに挑戦して、今回の学びを生かしていけたらと思います。ありがとうございました。



蔵を改装された施設をお借りして情報を整理

山本 那津子

(短期大学部 社会福祉学科 1 年次生)

今回、左義長まつりに関わる 3 名の方々にインタビューしました。

事前にホームページなどから予習していましたが、実際に訪れ、肌で感じたのは、左義長まつりはこれを愛する人々によって、季節や生きがいそのものとして受け継がれているということです。

昨年の左義長まつりは、新型コロナウイルス感染拡大の状況の中で、一部中止という苦渋の決断を下さなければならなかったということでした。本来、地域住民のためのまつりを、住民自身の命を守るために断念しなければならない危機的な状況にあるということ、そしてそれに対する左義長まつりを愛する人々の苦悩がひしひしと感じられました。

また、うかがったお話のなかでも、変化させ

ていくことによって伝統が守られるという興味深い現象が一番印象に残りました。観光と伝統文化のあり方として、私たちの世代にはなにができるのか、どう向き合っていくのか、という他の伝統文化も抱えている課題の解決のヒントが、進化の得意なこのまつりから得られるのではないかと考えます。そこで今回で完結するのではなく、これからも左義長まつりの動向を注目していきたいです。

もっと深めたいこととしては、左義長まつりを支え、受け継いでいく 10～20 代の若手の方の意見を聞きたいと考えています。

今回、左義長まつりを知って、自分たち若者から徐々に離れつつある伝統文化に触れることができました。これから自分がどうあるべきか考え続けることが重要であると考えます。とても有意義な時間をありがとうございました。



ふりかえりのオンラインワークショップ

4. コーディネーター所感

新型コロナウイルス感染症感染拡大の影響により、学内の様々な事業がオンライン化となったり、また、地域での行事も中止や縮小となったりする中、日帰りではありますが、現地へ赴き、プログラムを実施することができました。学生の社会との接点を作ることができたのではないかと考えています。

参加した学生は、伝統文化の継承は同じことを継続していくことではなく、時代の中で変化してきていること、それは、熱い思いをもって行動し、地域の方が自ら変えてきたことに気づき、そこに感銘を受けていました。これを機に、伝統文化や地域行事を身近なものとして捉え、社会を構成する一員として自分達に何ができるのかを考え、行動していったほしいと思います。また、オンラインだけでは感じるもののできないまちの空気感や様子を肌で感じる事ができ

たのは、大変有意義であったと思います。

今回のプログラムを通して、対面ならではの学びがあるということを再認識するとともに、オンラインでも有意義な活動、ワークショップができるということを実感することができました。今後も、学生の学びや気づきにはこういったものが大切なのかを考え、より良いプログラムを作っていきたいと思います。

〈報告者：國實 紗登美
(瀬田キャンパスコーディネーター)〉